



職業訓練と福澤，カント

一般の国民感覚からすると、「職業訓練」という名の響きには、広い意味での「教育」には収まるとしても、その本流からどこかはずれた亜流的な匂いが漂うようだ。どうも人間とは、厄介な動物である。先入観や偏見による価値判断により、対象の真の姿が曇ってしまう。

時代は、遡る。明治維新では江戸時代の士農工商の身分制度を廃して四民平等を掲げたにもかかわらず、実際には華族、士族、平民等の階層が残った。新政府は明治5年8月、学校設立の基本指針「学制」を發布し、実学重視、国民皆学、受益者の学費負担等を標榜したが、なかんずく「学問は身を立てる財本」として、平民でも学問を身に付ければ立身出世ができるという夢を与えた点が特筆される。そこには、明治5年2月に刊行された福澤諭吉（1835～1901）の「学問のすすめ・初編」から学んだ跡がはっきりとかがえる。それは当時340万部を超える大ベストセラーになり、大いに国民を啓蒙した。また翌年6月には「帳合の法」で日本初の西洋式簿記をも翻訳し、紹介している。しかし、明治10年4月に東京大学が創設されると、新政府は官立型普通教育の喧伝を強調し始めた。普通教育中心学歴社会の幕開きだった。せつかく「学制」の發布に福澤精神が盛り込まれたものの、実学重視の考え方が育たず、職人の技能やカネ勘定に関する技能等に係る実践や学問は、士農工商時代の潜在的差別意識と相俟って引き続き低く解釈される風潮に繋がった。福澤は、当時の役人の多くには国民に対する上下貴賤の差別が根強く残り、気品の低さ、日和見主義に辟易していることなどをあげ、役人がそんな状態であっても、大半の国民が立身出世は他にあらずという一心で役人を志すことに、多大な危惧を抱いていた。職業訓練が学歴社会への批判として職業能力の開発をテーマにしていることに鑑みると、福澤は、間違いなく、職業訓練関係者にとっては究極の開拓者である。職業訓練に係る国民の正しい認識を高揚させるためには、この制度が本来有する雄大な姿を正確にスクリーンに映し出し、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ等のマスメディアを通しての広報活動が不可欠である。そのためには、最初にぜひとも、現代においても格調高く冴えわたるカント哲学の認識論を紹介し、職業訓練礼讃への第一歩としたい。

イマヌエル・カント（1724～1804）の哲学史上における不滅の金字塔は、理性で宇宙のすべてが理解できると

独断的に判断した大陸合理論、認識の起源が経験だけであるとしたイギリス経験論の両者が共に行き詰まっていた時代に両者を統一し、独自の批判哲学を確立したことだ。その代表的なものは、彼の著書「純粹理性批判」に示されている。天動説を否定して地動説を唱えたコペルニクスにちなみ、自ら「コペルニクスの転回」と名付けた画期的な認識論だ。対象中心の考え方から認識中心の考え方（「主観＝人間の自由な思考」が客観を構成するという人間中心の哲学）への転回をその内容としている。

「人間は何を知り得るか？」という認識論では、私たち個々の人間が知り得る対象の範囲はあくまでも個々の人間の経験の範囲内での自然の因果関係だという（人間は経験の蒸留物である理性のみによっては認識を行うことはできず、対象をあるがままに認識する能力はない）。しかし、もし人間に経験に頼らなくても認識できる道具（認識形式）がもともと備わっているとすればどうだろう。カントはこの「経験に頼らない」「先験的な」「a prioriな」認識形式が、情報の受取機能である「感性」と情報の処理機能である「悟性」にあらかじめ内蔵されているものとした。悟性は英訳ではunderstandingとなるので、理解力と考えてよい。この認識形式（感性では時間、空間の2項目、悟性では量、質、関係、様相に関連する12項目）こそが他人と共通している客観的なフィルターであり、彼が範疇と名付けたカント認識論の要になっているものだ。

職業訓練の正しい認識においても、カントの認識論がそのまま役だつ。職業訓練そのものを国民に示すことは無理だが、国民の悟性や感性に内在する認識形式に職業訓練のすばらしさをマスメディアを通じて働きかけるのだ。カントは、死ぬ間際に葡萄酒を水で薄め砂糖を混ぜたものを口にし「Es ist gut！（これでよし！）」と言った。すごい！

てらしま えいぞう

略歴 昭和46年 早稲田大学第一商学部卒業
平成6年 日本障害者雇用促進協会
(現高齢・障害者雇用支援機構)
国立吉備高原職業リハビリテーション
センター職業訓練課長
平成16年 現職
著書 絵とき日商簿記入門テキスト(オーム社)
CAI学習による パソコン簿記・仕訳(オーム社)
新経理実務大事典(産業調査会)